慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	今澤慈海の生涯教育論
Sub Title	A theory of Imazawa Jikai's lifelong education
Author	山梨, あや(Yamanashi, Aya)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.57 (2003.) ,p.61- 73
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000057-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

今澤慈海の生涯教育論

A Theory of Imazawa Jikai's Lifelong Education

山　梨　あ　や*
Aya Yamanashi

The purpose of this study is to explain Imazawa Jikai's library theory as a theory of lifelong education.

Through practices in the library, he developed "life-long education" theory constituted of two types of integration: one is horizontal integration of library and school; the other, which starts after school, is vertical integration of them.

His theory was distinctive in that the education for children and adults should be constituted as the means of attaining " life-long education."

Besides "life-long education" in the library was considered to contribute not only to individual learning but also to cultivate oneself to take an active part in the society.

On the other hand, there was a contradiction in Imazawa's theory. Despite the fact that he recommended reading based on one's free and spontaneous will, the criterion of good books was decided only by librarians, which can be said "limitation" of Imazawa's theory.

In this paper it is demonstrated that it is necessary to locate the possibility and limitation of Imazawa's theory in the history of lifelong education, which will also help to consider the educational role of libraries today.

はじめに

今澤慈海（1882-1968年）の名は「日本の図書館界における偉大な先覚者[1]」,「児童図書館の父[2]」として図書館史の中でよく知られている。今澤の図書館論は「大正期の自由主義的な思想を背景[3]」として「自らの実行や経験を通し，日本の実情を考えに入れつつ児童図書館や児童図書についての考えを築き上げ」たものであり，「児童図書館員の専門性や教育についての面が捕え切れていない」ながらも「全体として（中略）現代にあっても基本的には立派に通用する普遍性をもっている」として図書館史において高く評価されてきた[4]。

今澤は幼少の頃保国寺住職の養子となり，読書と漢詩に親しむ生活を送った。高等学校を卒業する頃

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程（日本教育史）

には自身の蔵書だけで一千冊を超えていたという[5]。今澤は第五高等学校を経て 1907（明治 40）年，東京帝国大学文科大学哲学倫理学科を首席で卒業後，1908（明治 41）年に東京市に就職する。1913（大正 2）年より主事補として東京市立日比谷図書館に勤務し，1915（大正 4）年には全東京市立図書館を統括する館頭となり，1931（昭和 6）年に東京市を辞職するまでの 18 年間，東京市立図書館の発展に貢献した。この他日本図書館協会会長，理事長を歴任し，文部省図書館員教習所（後に講習所）の開所当時から 1940（昭和 15）年まで講師の職にあった。1934（昭和 9）年より成田山の荒木照定大僧正の招きに応じて成田に居を移し，成田中学校校長，成田山教育・文化・福祉財団理事長，成田図書館館長などを歴任する。成田ではライフワークであった『表解詳説梵文典』の執筆の他，成田山史編纂や千葉県史編纂などにも携わっている。今澤は一生涯を図書館および学究に捧げた人物といえるだろう。

しかしながら，今澤が図書館論の中で図書館を「生涯的教育」（今澤：1920, pp. 1-6）機関と位置付けていたことに関する検討は殆どなされていない[6]。今澤は社会教育という用語が多用されていた時代に「生涯的教育」という語を用い，学校教育と図書館における教育との水平的統合を基礎とし，両者を生涯に亘って垂直的に統合する教育のあり方を構想したのであった。今澤の図書館論の特徴とされる児童図書館論も，図書館を「生涯的教育」機関とする構想の一端を担うものであった。今澤の図書館論は一つの生涯教育論と捉えることができるものであり，その構想の中に公共図書館論や児童図書館論がどのように位置付けられるのかが改めて問われなければならないのである。本稿は生涯教育論の一つとして今澤の図書館論を検討するものである。

今澤が東京市立図書館館頭として活躍したのは，大正デモクラシーを背景に，社会教育構想や社会教育政策に対する関心が高まり，教育への関心が学校教育のみに限定されなくなった時期である。第一次大戦後は，欧米列強諸国における戦後の "reconstruction" が注目され，日本の戦後復興の方向性が模索された。雑誌『改造』が 1919（大正 8）年に創刊され，「改造」が流行語となったのもこの頃のことである。春山作樹は第一次大戦を「国民全体の戦争」と位置付け，「国民全体が自己の責任を自覚するのでなければ勝利は得られないと云ふ事を最も痛切に感ぜしめた」事件であるとしている。さらに大正期におけるデモクラシーは「従来少数者の責任であったものが，一般民衆に分担せられると云ふ事を意味する」ものであり，春山はここに戦後の「改造問題が起こ」り，特に「教育改造」，「教育上の機会均等」が「戦争と云ふ大事件によってもっとも明白に適切に其必要が示された」という。春山は「教育改造」において「人間の修養は一生の事業」であるととらえ，義務教育，学校教育のみでは人間の教育は不十分であることを指摘した上で，「与へられたる自由」を適当に行使し，「国民全体が自己の責任を自覚」するために「義務教育修了者になほ向上の機会を与へる」民衆教化事業が必要であると主張している[7]。同様に初代社会教育課長となった乗杉嘉寿も五大列強の地位を維持するには社会全体の改善が必要であり，「刻々に増加して行く発明発見に伴ふ新智識の多い所謂文化生活の真唯中に立って，人に後れず時流に伴ふて行かふとするには，生涯を修養に費やさねばなら」ず，「学校教育と云ふものも夫丈では不可ぬのである。」という[8]。

このように第一次大戦後の「教育改造」の枠組みにおいては国民全体の教育を再編するために一生涯を教育に費やす必要があり，それには学校教育，特に義務教育のみでは不十分であるという認識が存在していた。この一生涯に亙る教育を「機会均等」という名の下に保障するものとして学校教育以外の教育，即ち社会教育や成人教育に対する関心が高まりを見せたといえよう。さらに，欧米列強諸国に追随して国家の繁栄を導くためには「社会を自分自ら造り上げると云ふやうな」「自主的自立的」な人間の育

成の必要が主張され[9]，これを推進するものとして「自学自習（修）」が奨励される。大正期の新教育運動はこのような文脈で社会教育の中にも読み替えられていったといえよう。また，趣味や娯楽などが教育の対象として捉えられるようになったのもこの時期のことである。第一次大戦後の「デモクラシー」に支えられた「教育改造」，「機会均等」の主張は，教育を一生涯に亙るスパンで捉える視角を提供するものであり，人間生活のあらゆる場面での教育と自発的な学習が奨励されることとなった。このような状況下で図書館は自発的な学習活動の機会を提供する教育機関[10]，さらに「民衆的改造運動の混乱時代に於て（中略）民衆指導の任[11]」にあたる社会教化機関として注目されるようになる。

しかしながら，この時期に学校外の教育現場で実践に携わっていた人間が，どのような教育論を持ち，それに基づく実践や活動がどのように行われていたのかという問題に関してはあまり明らかにされているとはいえない[12]。今澤のように教育実践に携わった人間[13]の生涯教育論を検討することによって，社会教育に対する関心が高まった時期にいかなる教育論が構想されていたのかを把握することが可能となるだろう。

このような問題意識に基づき，本稿では図書館を「生涯的教育」機関とすることを目標としていた今澤慈海の図書館論を分析対象として，その生涯教育論を明らかにし，日本の生涯教育の歴史とその理念を重層的に把握する一助としたい。今澤は1910年代から1960年代まで長期に亘る執筆活動を展開しているが，本稿では生涯教育構想が大正デモクラシー期にどのように展開されていたのかを明らかにするという関心から，1910年代後半から1920年代までの今澤の論考や著作を中心に検討する。

1. 「生涯的教育」機関としての図書館

1) 東京市立図書館と今澤

東京市立図書館は東京市教育会の建議に基づき1908年に東京市立日比谷図書館として誕生した。日比谷図書館は設立当初から非専門的な「通俗図書館」としての性格を前面に打ち出していたこと，日露戦後景気が「文化産業」を成立させその享受層を拡大させたこと[14]，市電などの交通網の発達に伴って巨大な都市が形成されつつあったこと，さらに尾崎行雄や後藤新平ら図書館に理解のある開明的な人物が市長に就任したことなどによって順調に発展し，1921年には全20館から成る図書館網を形成するに至った。東京市立図書館の制度面に目を転ずれば，今澤が日比谷図書館主事に就任した翌1915年に，「中央図書館制」が導入されている。この制度の下では日比谷図書館の館長職に相当する「館頭」が全東京市の図書館を統括し，館頭の裁量で予算配分や人員配置などを含む図書館運営を行うことが認められていた。今澤はこの制度に基づき図書館網の整備，閲覧料の値下げや無料化[15]，児童奉仕の充実など大胆な機構改革を推進している。1915年から1930（昭和5）年までの東京市立図書館が，「発展期[16]」，「黄金期[17]」と称される所以である。1931年に東京市処務規定が改正されると，市立図書館全館は市教育局長の監督下に置かれた。今澤はこれを機に東京市を辞職し，以降，東京市立図書館は活動の性質を教化的なものとして行き[18]，「不振時代[19]」を迎えることになる。

今澤が日比谷図書館と関わる契機は，「郷土の先輩で市長秘書をしていた松木幹一郎の世話で同郷の友人十河信二・新名直和等と共に後藤新平等の一流人物に接近し[20]」，高楠順次郎とE. A. Gordon夫人によって寄贈された約10万冊の蔵書を「日英文庫」とするべくその分類整理を委嘱された折に，尾崎行雄や渡辺又次郎等にその才能を見出されたことにあるという（今澤：1932, p. 196）。したがって今澤には図書館学を体系的に学んだ経験はなく，独学で図書館論および管理・運営方法を習得したことにな

る。今澤は内外の図書館関連の文献からの情報や日比谷図書館での経験を基に,『図書館雑誌』や 1921 年より今澤の手で一般向けに発行された東京市立図書館の館報『市立図書館と其事業』等に次々と図書館論を展開していった。そしてこれら一連の論考が図書館論として体系化されたのが『図書館経営の理論及実際』(1926 年, 叢文閣, 以下『理論及実際』) であるということができる。それでは,『理論及実際』が発行されるまでの過程で, 今澤の「生涯的教育」機関としての図書館論がどのように形成されていったのかを見ていくことにしよう。

2) 「生涯的教育」機関としての図書館論の形成

今澤が最初に自身の図書館論を展開しているのは『図書館小識』(今澤: 1915) においてである[21]。ここで今澤は「吾人が学校に於て学ぶの時期には制限あり, 既に一定の年限を経過する時は何人も学校去らざるべからず。而して一旦学校を離れ教師に遠りたる後, 自己の判断を以て良書を選択し, 自己の資金を以て之を購求し, 且自己の家庭に之を備えつくることを得る境遇に在る者果して幾人在りや。」(p. 3) と学校教育の限界を指摘し, 学校教育と対比させながら図書館における教育の必要性を主張する。今澤は図書館を「収容年限無く, 其老幼男女を別つこと無く, 且個人の力を以ては到底蒐集し能はざる内外の図書を備付るを以て, 彼等一たび学校を去り教師に遠りたる後と雖も, (中略) 不知不識の間に精神を修養し, 知見を拡充し, 品性を高め, 好尚を上せ, よりて自らよく教育」(p. 3) する機関と位置付けた。さらに, 今澤は図書館には「階級の設け」が無いので,「下級学校」しか出ていない者も「志」さえあれば高い授業料を必要とせず「わずかな閲覧料」(p. 4) で自由に図書館において「教育の不足を補」(p. 3) うことができるという。今澤はこれらを総括して図書館を「其 (引用者注, 学校教育) 足らざる所を補ひ, 其及ばざる所を達せしめて, 以て一国々民の教育を完成する」(p. 5) 役割を担う教育機関と位置づけた。その上で今澤は図書館の目的は「国民全体をして読書の趣味を解せしめ, 其知徳を啓発せんとするに在りて, 一国民の小学校に於て始められたる教育を, 終身継続し得る機会を成年者に与へ, 以て教育の効果を発揮せしめんとするにあ」(p. 5) るとしている。この論で注目されるのは, 学校教育の限界を指摘しながら図書館に「小学校に於て始められたる教育を, 終身継続し得る機会を成年者に与へ, 以て教育の効果を発揮せしめん」ことが期待されていることである。この時点では「教育」が「生涯的教育」であるとは位置付けられてはいないが, 学校教育と図書館とが連携することで初めて教育が完成する, という後の今澤の論における垂直的な統合の原型を見出すことができる。

今澤が図書館を「生涯的教育」機関と明確に位置付けたのは「公共図書館の使命と其達成」(今澤: 1920) という論考においてであった。今澤は,「広義の教育又は修養」を知的側面と情意的側面の陶冶から成るとした上で (p. 1), 教育のあり方について次のように主張する (p. 2)。

(一) 人生は無窮, 人格活動は生涯的なるを以て, 之が進展の手段方法たる広義の教育修養も亦生涯的ならざるべからず

(二) 又人格は萬人萬具にして其形式は普通平等なるを以て之が教育は全体として部分的, 差別的, 階級的ならず, 全般的, 普遍的, 平等的ならざるべからず

(三) 又人格教育は其が生涯的なる以上, 出来得る限り経済的に達成せられざるべからず

(四) 又人格活動の標目たる理想は, 古今に通じ, 中外目悖らざるべきものなるを以て, 此教育は知新と温古とを兼ね, 且内外に渉らざるべからず

（五）　又人格に尊ぶ所は自覚自定にあるを以て，之が教育は出来得る限り自発能動的ならざるべからず

ここで今澤は人格を形成するための教育は「生涯的」であるのに対して，学校教育の果たす役割は「一生に対する教育の発程準備」に過ぎないこと，「生涯的」教育の達成は「平等的」形式によって「自発能動的」にそして可能な限り「経済的」になされるべきことを主張している。その上で今澤は「読書は人生進展の手段の全部」(p. 2) ではないが，「最も重要捷径」(p. 2) であるので，生涯的教育を実践するためには「読書力の養成と相待ちて読書の趣味涵養」(p. 2) が必要であるという結論を導き出すのである。ここにおいて公共図書館は「公有或は公営に属し，公衆に対して公開せる図書館にして，最大多数の為に，其生涯を通じて，最も経済的に内外古今の良書を供給し，彼等をして各自の趣味能力に相応し，自由に閲読利用せしめ，彼等自身をして自発的に教育修養せしめ得るところなり。是れ公共図書館の解義にして，同時に其目的なり」(p. 3) とされ，図書館は明確に「生涯的教育」機関と位置付けられ，「良書の閲読奨励に関する奉仕」(pp. 5-6) の任務を担うこととなった。

図書館を「生涯的教育」機関とする構想は，『図書館小識』や『図書館雑誌』等の専門書・専門誌のみならず，日比谷図書館の館報『市立図書館と其事業』(以下『其事業』) の中でも頻繁に打ち出されていくことになる。『其事業』の第一号には，「公共図書館は公衆の大学なり」と題する一文が掲げられている。今澤は「真の文化的発達は社会の各人が自由なる意志により，自らを教育するによりて始めて可能となる」と生涯的教育には「自らを教育する」ことが不可欠であると強調し，「此の目的の達成に最も有力なる機関」は公共図書館であると結論付けた（今澤：1921a, pp. 2-3)。また今澤は図書館における「読書趣味」や習慣は「一日にして養はれず，必ず幼少の時より準備せられざるべからざる」（今澤：1923, p. 3）として幼少期からの働きかけの必要性を唱えている。

今澤の図書館論の第一の特色は，教育を「生涯的教育」と位置付けた上で，図書館を個々人が自発的に，自由な意志に基づいて「生涯的教育」を実践する機関であると捉えていたことである。この「生涯的教育」は「部分的，差別的，階級的ならず，全般的，平等的にして，機会の均等を得しめ」るべく，「出来る丈経済的に」実践することが重視され，この目的に合致するのが図書館であると考えられていた。つまり，今澤は図書館が始めにあってその教育のあり方を模索するのではなく，あくまで「生涯的教育」を達成するための教育機関として図書館を位置付けていたのである。今澤の論は，社会教育に対する関心が高まった時代にあって「生涯的教育」の重要性を指摘していた点で注目される。なぜなら学校教育の限界を補い，生涯に亘る教育を行うという観点から図書館における教育が注目されるようになるのは今澤より後のことだからである[22)]。

第二の特色は，今澤は図書館を「良書の閲読」を奨励する「生涯的教育」機関として機能させる構想のもと，児童や成人に対する働きかけの必要性を主張していたことである。つまり，今澤の「生涯的教育」論は，幼少期に始まる学校教育を図書館における教育と連携させることにより，生涯に亘って教育を垂直的に統合しようとする一つの生涯教育論であったのである。今澤が展開した「生涯的教育」論は幼少期における学校と図書館における教育の水平的統合と，学校教育終了後の教育の垂直的統合という二つの統合によって成立する生涯教育論であったといえる。

これらの特色を踏まえ，以下では今澤の「生涯的教育」の具体的な内容について児童図書館論および「学校と図書館の連絡」についての論考から明らかにしていきたい。

2. 今澤の児童図書館[23]論

1) 児童図書館の目的

「児童と図書館」(今澤: 1912) は今澤が発表した児童図書館論の中で最初の論考である。ここでは大部分がアメリカの公共図書館における児童室の紹介に割かれているが，その中で注目されるのが「是等諸活動（筆者注，公共図書館の児童部の活動）は常に其の中心を児童の読書趣味の涵養に置くので，此の中心をはづれたる活動は，児童図書館の活動の主要目的でないと云ふことである。」(p. 11) という一文である。ここに今澤が当初から児童に対する働きかけの目的を「読書趣味の涵養」とする認識を持っていたことを見出すことが出来よう。

『図書館小識』(今澤: 1915) においては，児童図書館は「専ら児童用の図書を蒐集し，簡易の方法を以て之を閲覧せしめ，時々有益にして興味ある展覧会，談話会等を催し，小国民の為に読書趣味を養成せんとするもの」(p. 12) であると明確に定義された。今澤は児童図書館の目的を次のように列挙している (pp. 73-74)。

（一） 善良有益なる読物を児童に供し，有害又は不適当なる図書の閲覧を防遏すること。
（二） 高尚清新なる知識と娯楽とを得しむること。
（三） 幼児より読書の習慣を与へて其趣味の涵養を計り，他日成人たるの後図書館を利用して益自己の修養に資し，以て一般国民の知徳水準を向上せしめんとするの素を成すこと。
（四） 生計上父母の保護行き届かざる都会の児童をして，或は街路に於て悪戯を成し，或いは徒に諸所を徘徊して身体上及精神上に悪影響を蒙る危険を免れしむること。
（五） 常に学校教師の補助者となり，教授上又参考上必要なる図書を供給して之が価値及用途を示し以て家庭に於ける修養の便を与ふること。
（六） 天性読書及修学を愛好する児童にして不幸にも家庭又は学校に学ぶの機会を有せざる者の為に，特殊の便益を与ふること。

ここでは，児童図書館において児童の読書趣味を涵養することが「他日成人たるの後図書館を利用」できるようにすることと結び付けられている点が注目される。しかしながら，「成人たるの後図書館を利用」できるようにすることがなぜ必要なのかについては未だ言及されていない。

ところが『理論及実際』(今澤: 1926) の「児童図書館の目的」では，目的の項目およびその内容は大体において『図書館小識』の内容を引き継いでいるものの，幾つかの変化が見られる。最も大きな変化は，『図書館小識』の「児童図書館の目的」においては（三）とされていた項目が（一）とされ，その内容も「幼児より読書の習慣を与へて読書の趣味を涵養し，他日成人の後図書館を利用して益自己の修養に資し，以て生涯的教育を達成し，一般国民の智徳の水準を向上せしむる素となすこと」(今澤: 1926, p. 491, 傍点引用者) となったことである。今澤は読書趣味，および習慣の涵養には幼い頃からの働きかけが重要であることを主張しており，公共図書館を「生涯的教育」機関とする過程を経て，児童図書館が「生涯的教育」を達成するためのものであることを明確化したといえよう。このように今澤は市立図書館での勤務を重ねるごとに次第に図書館を「生涯的教育」機関と位置付ける方向へと論を進化させていく。その一方で，「有害又は不適当なる図書の閲覧を防遏すること」に見られるような，「良書閲読の

奨励」の姿勢は一貫して変わらなかったこと，さらに「生涯的教育」の目的とは何かが明確に示されないことには留意する必要がある。

2) 読書趣味の涵養

それでは，今澤がしばしば言及する「読書趣味」とは何だろうか。また，「読書趣味」を涵養することは図書館における「生涯的教育」とどのような関わりをもつのだろうか。この問題を，今澤の児童図書館論の観点から明らかにしていこう。

今澤が「読書趣味の涵養」についてまとまった言及をしているのは，「通俗図書館及通俗読み物」（今澤：1921a）においてである。今澤は学校教育は「如何なる書物を読むべきか」を判断する一種の「鑑賞力」，すなわち「読書趣味」は涵養し得ないという (pp. 16-19)。なぜなら学校では「無趣味な教科書で鍛へられ」(p. 15)，その内容も断片的であるから「学校を出てからは殆ど書物を見ない」(p. 15)，故に「読書趣味が涵養されない」(p. 16) ことになるのである。そして今澤は読書趣味に基づく読書習慣を形成するためには「成るべく断片的の読書を避けて，終始一貫した，纏った物を読むと云ふ習慣」(p. 13) を「どうしても小学校或は中学校あたりから養成しなければ出来ない」(p. 17) という。今澤にとって「読書趣味」を涵養して自分に必要な本を見定める「鑑賞力」を身につけることは，「自分自身によりて生み出されたる内部的動機によりて自分自らを教育」（今澤：1921b, p. 3）し，「生涯的教育」を実現するために不可欠なものであった。「読書趣味」を涵養することは，自律的な読書を奨励し，「自らを教育」する原動力になると考えられていたのである。

このように今澤は幼少期からの読書趣味の涵養によって「生涯的教育」の基礎を形成することを構想していたが，これが市立図書館の実践にどのように生かされていたのかを見ていくことにしよう。まず今澤が着手したのは日比谷図書館における児童の館外帯出の無料化である。今澤が館頭に就任後，1915年に東京市立図書館の閲覧規程が改正され，館外帯出の無料化が実現した。この動きは日比谷を皮切りに市内各図書館へと拡大していく。さらに1915年8月，館則の改正によって児童の閲覧料の無料化が実現し，図書館利用の年齢制限に関する条項も撤廃された。このことは，あらゆる人々に開かれた図書館を実現しようとした今澤の「生涯的教育」の理念を実現した一例といえよう。また，幼少の頃から読書趣味を涵養する目的で行われた実践として「お話会」を挙げることが出来る。このお話会は「良いお噺によって，（中略）不知不識の間に良書を好み，之に親しましめ，お噺の手段によって児童を立派な読書家に仕立て人生の生涯的教養の基礎を作らしめやうと，市立図書館では各館とも時々このお伽会を開催して居ります[24]。」とされ，1921年から31年までの10年間で，館報で確認できるだけでも26回開催されている。会の頻度は年によって多少の差はあるものの，平均すると年2回は市内いずれかの図書館で大規模なお話会が開催されていたことになる。この他日比谷図書館では毎週土，日曜日の午後1時から，深川図書館ではほぼ毎日30分「お話の会」「オ話ノ時間」が設けられている。これらも併せて考えると市立図書館では日常的にお話会が開催されていたといえよう。さらに，市立図書館の児童室では児童が直接図書を選択する方式を採用していたが，1919年以降は「両三年の後には普通図書館を利用する児童のために，図書の使用方法を指導しようとする目的[25]」から児童用の図書目録が作成され，設置されるようになる。この目録の設置は児童が図書館を利用するための準備教育の役割を担っていたといえよう。

このように今澤は読書趣味の涵養を幼少期から行うことを目標とする児童図書館論を展開し，この論

に基づく実践を展開した。このような児童に対する働きかけは，どのように「生涯的教育」の達成へと結びついていくのだろうか。今澤は幼少期からの働きかけを生涯に亘って維持・発展させ，「生涯的教育」とするという問題を「学校と図書館との連絡」というキーワードにおいて検討している。以下では「学校との連絡」についての論考から今澤の社会教育，成人教育に対する見解を検討し，今澤の「生涯的教育」論における教育の垂直的な統合のあり方を明らかにする。

3. 学校と図書館との連絡

今澤は『図書館小識』において学校と図書館との連絡の意義を，「学校と図書館とは唇歯の関係にあり。相扶け相補ひて始て能く教育の成果を収め得べきなり」（今澤：1915, p. 81）にあるとしている。さらに「学校は吾人が将来自ら世に処するに必要なる器具を授くる所にして，此器具を終生に亘りて用うべき資料は之を公共図書館に求めざるべからず。乃ち知る公共図書館の任務は主として学校教育の終始する所に始まるべく，而して学校教育にして其発程を誤らざれば公共図書館の援助を得て終生の教育を継続することを得べきなり」（今澤：1920, p. 2）と学校と図書館の担う役割の違いを指摘する。今澤によれば学校教育は「将来自ら世に処するに必要なる器具」，すなわち生きて行く為に最低限必要な基礎を教える役割を担い，図書館は学校教育で培われた基礎を生涯に亘って応用する「資料」を与える役割を担っていた。勿論，今澤は「我等は学校と対抗的教育の組織を立て特殊な誘惑物を備へて児童の注意を学校より奪はうとするものではない。」（今澤：1925b, p. 26）と主張するように学校教育そのものを否定してはいない。今澤にとって，学校教育も図書館における教育も，「終生の教育」を行うためには共に欠くことができない存在であった。つまり学校教育と図書館は対立するものではなく，両者は「緊密な関係を持って」（今澤：1925b, p. 26）おり，図書館は学校教育の効果を維持しつつ，それを生涯に亘って発展させるものとして捉えられていたのである。今澤はそれぞれの教育機関の特質を踏まえ，これらの特質を「学校と図書館の連絡」によって維持・発展させていくことで，教育を生涯に亘って垂直的に統合することが可能になると考えていた。

このように教育を生涯に亘って垂直的に統合するという考え方は，今澤の社会教育に対する見解にも見出すことができる。今澤は「学校教育が一定の課程を定め，被教育者をして強ひて学ばしむる傾きある」に反して社会教育は「学校教育の効果を維持せしめつつ」，「被教育者をして，自由に自発的に」学ぶことを可能にし，図書館は「学校に在ると在らざるとに論なく，一般民衆を対象とせる，生涯的社会教育機関」であるとしている（今澤：1926, p. 24）。ここから今澤は社会教育を学校の在不在を問わず自由に自発的に学ぶことを可能にする「生涯的教育」と捉えていたことが分る。このように生涯を通じて教育することを構想していた今澤の関心は，成人教育にも向けられることになる。今澤は「成人教育と図書館」（今澤：1930）において，「実際図書館教育そのものの大部分はこの成人教育そのものである」，「成人教育も真に其の効果を望むならば，青年時代，尚遡って幼少年時代からの準備が必要で」あると述べ，図書館における教育は「老人教育」も含めた「人生の始終に渉る生涯的教育」であるという。このように今澤の「生涯的教育」は学校教育の成果を認めつつも，その限界を踏まえた上で図書館を利用して「生涯に亘る教育」を実践しようとするものであった。「学校と図書館との連絡」には，今澤の論が学校における「一時的」な教育と図書館における「永久的」な「生涯に亙る」教育というそれぞれの教育機関の特質を踏まえつつ，両者を垂直的に統合することを目指した一つの生涯的教育論であったことが反映されている。

実際に今澤は義務教育を終えようとする児童に図書館を利用する方法を教授すべく，担任の教員の引率の下図書館への見学を勧誘する案内状を市内の尋常小学校に送付したり，利用者の読書調査の結果を踏まえて，人気の高い作家を図書館に招いて「著者講演会」を開催したり，全国に先駆けて1923年より読書週間を実施するなどして，読書趣味および習慣の涵養に努めた。また，市立図書館ではしばしば当時の人々の関心事であるテーマを設定し，それに関連する資料や図書の展示を行う展覧会を開催している。関東大震災の折には「江戸以来東京震災資料展覧会」を開催し，7200人余りの来場者を集めた[26]。さらに日比谷図書館においては「閲覧者ノ研究上ノ利便ヲ図リ」，「事項ノ研究調査ニ付キ必要ナル参考図書ノ問合セニ応答スル」べく「図書問合用箋」を用意し，現在のレファレンスサービスを行っている[27]。この活動は「知識を求むる者及び研究調査を為さんとする者に助力を与へ」，「多少なりとも一般公衆を指導せん」（今澤：1924, p. 3）とする今澤の理念を実現したものといえよう。これらの活動は，年齢や階層を問わず多くの人々が図書館を利用し，個々人の読書や学習活動を行うことを奨励するものであり，ここに今澤の「生涯的教育」論の実践の一端を見ることができる。

今澤の構想した図書館における「生涯的教育」は，個人の学習に収束していくものとばかり考えられていたわけではない。今澤は図書館における教育の果たす役割を，個人と社会の関係の中に位置付けようとしていた。今澤は先の「成人教育と図書館」において，アメリカでは成人教育が重視される理由を「かれ等（引用者注，労働者達）を自己の社会に都合のよいやうに馴らして了」い，「労働者一同廻れ右をやらせて，逃げていく心配のない，過去の理想を与へようと」することに求める論があることを紹介し，「吾人は政略的成人教育には不賛成である」としている（今澤：1926, pp. 2-3）。今澤は個人の進歩によって社会の進歩がもたらされるとした上で，図書館の担う役割を「社会の集合的記憶」に求め，これが社会の「集合的知識と道徳との発達」に資する可能性を指摘する（今澤：1925b, p. 29）。なぜなら図書館は「社会の集合的記憶」であるが故に，「社会の人々が接触の自由な場所に保存されてある名誉ある記録に振返る時，かれ等は卑劣な行動を黙認したり，或は公然の略収を黙許したりする事は出来ない筈」なのである（今澤：1925, p. 29）。このように今澤は図書館が「社会の集合的記憶」としての役割を担うことによって，個人が社会の動きに目を向け，社会へと働きかけていく存在となる可能性を示唆した。つまり，図書館における教育は「個人の教育」に資するだけではなく，「卑劣な行動を黙認したり，或は公然の略収を黙許」しない人間を育成する役割を担うとも考えられていたのである。今澤が図書館をあらゆる年齢や階層の人々のための教育機関と捉えていたこと，「政略的成人教育」に対して批判的であったことにも見られるように，今澤の「生涯的教育」論には自己完結・自己充足的な学習に止まらず，社会に働きかける主体形成を促す可能性を見出すことができる。

勿論，このような今澤の「生涯的教育」論には全く問題がなかったわけではない。今澤の図書館論は次第に図書館を「生涯的教育」機関と位置付ける方向へと進化していくにもかかわらず，図書館における「生涯的教育」の目的が明確に示されないという問題を孕んでいる。したがって，今澤の図書館論において一貫して主張される「良書閲読の奨励」も何を目的として行われているのか，また「良書」の基準は何かという問題も曖昧なままである。今澤の「生涯的教育」論の問題点について，彼が一貫して主張し続けた「良書閲読の奨励」という視点から検討してみることにしよう。

今澤は1920年代後半から1930年代にかけて児童のみならず義務教育を修了した「青年」層，さらに児童や「青年」層の指導的立場にある「親」に対する働きかけに関心を寄せて行くが，これは選書に対する関心を特化させていく過程でもあった。今澤は「小学校五六年カラ中学校女学校一二年マデノ遷リ

変リノ時期」に適当な読物が出来ていることを指摘し（今澤：1928a, pp. 23-25），青年期の児童が「良き図書」に触れること，さらに選書の重要性を主張している（今澤：1928b, p. 9）。今澤は図書館が「児童と成年者との中間にある若い人々」に与える「中間読物」を提供することは勿論であるが（今澤：1930 a, p. 2）「将に学校を去らんとする児童」に対しては図書館員に加えて「学校教師と父兄」とが「如何なる図書を推薦すべきか，如何にして之が閲読を奨励すべきかに就きて一致協力」し（今澤：1926, p. 578），特に「世の父兄たち」は「青年期に於ては何を読むべきか，そこには如何なるものがあるかを心得，更に進みて己が子弟が何を読みつゝあるかを知らなければならない。」（今澤：1930b, pp. 2-3）として親が青年期の児童の選書に積極的に関わるべきであるという見解を示している。今澤は 1928（昭和 3）年以降，数回にわたって JOAK のラジオ講座に出演するが，そのいずれの講座も児童の読物の選書に関するものであった。

ここで注目されるのは，児童の選書に関して「どう云ふ本を読めということを教へてあるならば，それは読んではいけないと云ふことができる。」（今澤：1921b, p. 3），「小供ノ読物ノ選択ハ先ズ予メ大人ガ色々ナ方面カラ不適当ト認メタルモノヲ取除キ」（今澤：1928a, p. 8）と述べ，成人の選書に関しても「公衆の希望と必要（希望なくとも奨励すべき図書）とに留意し，常に其指導者を以て任じ，其盲従者随伴者ならざること」（今澤：1926, p. 181）とあるように，あくまで選書を行うのは図書館員に代表される教育者側の人間であるということである。このことは選書や「良書」の基準は被教育者の年齢如何に拘わらず教育者側が定めるものであり，被教育者は教育者の示す「良書」の基準に即して読書趣味を形成することが求められていることを示している。

さらに今澤は「腹の出来た人，頭の豊かな人には所謂どんな悪書でも，それから相当の栄養を摂ることが出来」るので「図書の選択などは，或点までは不必要」であるが，「中人以下についてはよく心すべきことで，更に趣味の向上と読書の趣味，読書の力を一層に養はるゝが肝要だと思ひます。」（今澤：1930c, p. 18）とあるように，階級差別的な選書，読書の奨励を主張するようになっている。このような今澤の論は被教育者の一定の自発性を認め，それを育成しつつも，そのエネルギーを国家の繁栄へと収束させていこうとする同時代の社会教育論や成人教育論と通底するものである。今澤の「生涯的教育」論においては終始一貫して「良書閲読」の奨励が主張されているが，この主張は必然的に 20 年代後半から 30 年代にかけての「選書」に関する論の特化，さらにその論調が「教化」的な色彩を明確にしていく基礎となるものであった。したがって今澤の 20 年代後半から 30 年代にかけての論の出現は単なる時代的制約によるものではなく，1920 年代に形成された今澤の「生涯的教育論」に基底としてあった，目的を明確にしないままに「良書閲読の奨励」を行うという問題点の当然の帰結として理解されるのである。

おわりに

今澤は教育を個々人の自由で自発的な意志に基づく「生涯的教育」と捉え，これを実践するための教育機関として図書館を位置付けていた。今澤が展開した図書館論は，一貫して「生涯的教育」を達成するという目標に貫かれており，幼少期における学校教育と図書館の水平的統合と，学校教育終了後に始まる両者の垂直的統合という二つの統合から成る生涯教育論であったといえる。今澤は生涯に亘って教育を行うという観点から学校教育を終えた成人に対する教育に関心を寄せ，成人教育を成立させるべく児童に対する働きかけの重要性を強調したのであった。つまり，今澤の児童に対する働きかけは成人教

育の基礎と位置付けられ，両者を垂直的に統合することで図書館における「生涯的教育」を実践するという目標の下になされたものである。「生涯的教育」を見据えて児童や成人に対する教育のあり方を模索し，「学校と図書館との連絡」によってその効果を生涯に亘って維持発展させていくという「生涯的教育」論は，学校教育の補完として社会教育や図書館を捉えていた当時において，極めて先駆的で独自の生涯教育論である。さらに，この論は東京市立図書館の実践にも生かされ，図書館の発展を導いたという点においても評価される。

しかしながら，今澤の「生涯的教育」論には問題があったこともまた事実である。今澤は図書館での勤務経験を経て徐々に「生涯的教育」論を形成したものの，ついに「生涯的教育」の目的とは何かを明確に示すことはなかった。したがって，今澤の「生涯的教育」論は如何なる目的にも従属し得るものであり，ここに「生涯的教育」論の限界性があったともいえるのである。図書館史ではしばしば今澤の館頭在任期間をして市立図書館の「黄金期」とし，今澤の退任を機に「不振時代」を迎えるという評価が下されてきた。しかしながら，30年代の論も含め今澤の図書館論を検討することで示されたのは，このような変化の理論的な下地は今澤の時代からすでに準備されていた可能性があるということである。今澤は論の形成当初から一貫して「良書閲読の奨励」を図書館の重要任務と位置付けていたが，被教育者の年齢如何に拘らず，「良書」の基準と選書はあくまで図書館側，即ち教育者側によって定められるべきものと考えられていた。したがって今澤の論において被教育者は教育者の要求に対して受動的な存在でしかなく，今澤が重視した被教育者の自主性や自発性は教育者側の定めた枠の中でのみ認められるものである。このような今澤の論の性質は同時代の社会教育論や成人教育論と通底するものであり，その意味において今澤の「生涯的教育」論は大正期における社会教育論や成人教育論ときわめて同時代的な性質を有するものであったともいえる。今澤の「生涯的教育」論には被教育者の自主性や自発性を認めつつも，その発現を教育者の定めた枠の中に押し込めるという矛盾が内包されているのであるが，この矛盾は「生涯的教育」論の目的が明確に示されないまま，今澤の論が市立図書館において実践され，この実践が一定の成果を収めたことによって顕在化することはなかった。今澤の論の限界性は，同時代の図書館を社会教化機関として機能させようとする目的の反映ともいえる，20年代後半から30年代にかけて選書への関心の特化，階級差別的な選書と読書を奨励する論の出現という形で示されることになる。

今回今澤の「生涯的教育」論を読み解くことで示されたのは，教育論の目的の明確化が留保されることによって，その論は如何なる目的にも従属し得るという限界性を孕んだまま実践のみが行われるという問題である。そしてこの問題は今澤の論に特有なものではなく，現代における生涯学習の教育目的とは何か，さらに「学習者主体」の生涯学習の実践が教育目的との関連で改めて問い直されなければならないことを示唆している。その意味において，今澤の「生涯的教育」論から導出された限界性は極めて現代的な問題提起をしているということもできるのである。

《今澤慈海文献一覧》

今澤慈海　1912「児童と図書館」『図書館雑誌』第16号
日本図書館協会編　1915『図書館小識』
今澤慈海・竹貫直人　1918『児童図書館の研究』博文館
今澤慈海　1920「公共図書館の使命と其達成―人生に於ける公共図書館の意義―」『図書館雑誌』第43号
――――　1921a「通俗図書館及通俗読み物」文部省普通学務局編『社会教育講演集』地方行政学会
――――　1921b「公共図書館は公衆の大学なり」『市立図書館と其事業』第1号

――― 1923「読書趣味の養成と師範学校」『其事業』第 13 号
――― 1924「参考図書の使用法及び図書館に於ける参考事務」『図書館雑誌』第 55 号
――― 1925a「成人教育と図書館」『其事業』第 30 号
――― 1925b「都市に於ける教育の中心としての図書館」『社会教育』第 2 巻第 11 号
――― 1926『図書館経営の理論及実際』叢文閣
――― 1928a「児童読モノヽ選ビ方ト与ヘ方」今澤慈海放送原稿
――― 1928b「図書選択と思想問題」『図書館学講座』第 2 巻，図書館事業研究会
――― 1930a「中間集書に就て」『東京市立図書館と其事業』第 57 号
――― 1930b「読書の功罪」『東京市立図書館と其事業』第 58 号
――― 1930c「家庭と読書」社会教育協会編『婦人講座』第 6 編
――― 1932「館にありし頃」『書物展望』第 2 巻第 2 号，1932 年

注)

1) 細谷重義・関野真吉編「今沢慈海著作年表（稿)」『ひびや』第 130 号，1980 年，pp. 72-81
2) 赤星隆子「今沢慈海の児童図書館論―英米文献との関係を軸とした一考察―」『図書館学会年報』第 36 巻第 4 号，1990 年，pp. 167-183
3) 奥泉和久「『市立図書館と其事業』の成立と展開」『図書館界』第 52 巻第 3 号，2000 年，p. 138
4) 赤星，前掲論文，p. 180
5) 秋岡梧郎「今沢慈海先生をしのぶ (2) 人間の教師 今沢慈海先生」『図書館雑誌』第 63 巻第 4 号，p. 26
6) 奥泉は前掲論文において今澤が図書館を「生涯的普遍的教育」機関とすることを目指した論を展開していたことに触れ，今澤の図書館論を整理する必要性を指摘しているが，論文では館報の成立過程に焦点が当てられている。
7) 春山作樹「民衆教化事業の任務」『社会と教化』第三巻第三号，1923 年，pp. 6-8 なおこの論文中で春山は民衆芸術・娯楽のあり方についても言及している。
8) 乗杉嘉寿「社会改造の機能としての図書館に就て」『図書館雑誌』第 39 号，1919 年，pp. 17-23 および「文化生活と図書館」『社会と教化』第二巻第九号，1922 年，p. 6
9) 乗杉嘉寿『社会教育の研究』1923 年，同文館，p. 48
10) 例えば乗杉は「文化生活と図書館」(注 8) において「社会教育の方法中，外から之を強ひるのでなくして，各人自らの要求によって，その欲するだけ修養することができ，而もその効果の著しいのは図書館設備」であり，図書館を「各個人を文化的に洗練するには最もよき機関」としているし，同じく社会教育官僚であった川本宇之介も「学校教育以外に於て，寺院自社も含ませて論ずると図書館が，矢張其の他の社会教育の中心として大いに活躍するところがなければならないと信ずる」と述べている（「教育の社会化と社会の教育化」『社会と教化』第一巻第九号，1921 年，p. 11）乗杉と川本は 1921 年文部省図書館員教習所（23 年図書館講習所と改称）を開所し，今澤を講師として招いている。乗杉と川本の図書館論については拙稿「東京市立図書館における社会教育実践―今澤慈海の図書館理念と活動を中心として―」『慶應義塾大学社会学研究科紀要』第 56 号，2003 年，pp. 51-62 において言及している。
11) 今井貫一「改造に際して」『図書館雑誌』第 43 号，1920 年，p. 9
12) 山口源治郎は「佐野友三郎論（上）（下）―通俗図書館論を中心として―」『図書館界』第 36 巻第 1 号，1984 年，pp. 25-34，『図書館界』第 36 巻第 4 号，1984 年，pp. 194-200 において山口県立図書館で先駆的な図書館論および活動を展開した佐野友三郎について詳細な検討を行っている。佐野の論は図書館の「学校との連絡」や幼い頃からの読書趣味の養成の必要性を提唱している等の点で，今澤に与えた影響も少なくないと考えられる。しかし，山口は佐野の発想の基本には「通俗図書館の成立及び普及」という観点からこれらの働きかけを行うという戦略的見地に立脚していることを指摘しており，「生涯的教育」を達成するべく図書館における教育の重要性を主張した今澤とは異なる立場にあるといえる。また，柳沢昌一は「近代日本における自己教育概念の形成」（社会教育基礎理論研究会編著『叢書生涯学習 I 自己教育の思想史』1987 年，雄松堂出版）において中田邦造の図書館論に言及しているが，昭和初期の活動の検討が中心となっている。
13) 今澤は文部省図書館員教習所において乗杉や川本と共に講師を務め，川本とは同時期に東京市に勤務していた経験を有するという点でも注目される。
14) 南博・社会心理研究所『大正文化 1905-1927』勁草書房，1965 年，p. 118-120

15) 1916年には日比谷図書館の児童室と深川図書館の閲覧料が無料化され，1921年には日比谷図書館の新聞雑誌室の閲覧料が無料化された。しかし，日比谷図書館の成人の閲覧料の無料化は実現しなかった。
16) 東京都立日比谷図書館『五十年紀要』1959年，p. 25
17) 細谷重義「東京市立図書館の変遷―日比谷の創立から現代まで―」『ひびや』4，1958年，p. 4
18) 奥泉，前掲論文，p. 139および佐藤政孝『東京の図書館百年の歩み』泰流社，1996年，pp. 126-127 佐藤は今澤の退任，市立図書館の職務規程の改正に伴い，館報の内容が教化色の強いものとなったとしている。実際に従来利用者の好みを踏まえて作成していた目録は図書館側からの「推薦」が中心となり，利用者向けの講演会も官僚による講話が多くなっている。
19) 細谷，前掲論文，p. 4
20) 村尾力太郎「菩薩道に精進した慈海老師」成田山教育文化福祉財団『今澤慈海先生追悼録』1965年，p. 31
21) 尚，本書が今澤の執筆によるものであることは細谷・関野編，前掲論文で確認されている。本節での同書からの引用は，（　）内にページを示すこととする。なお，本稿で引用文は出来るだけ新字体に改めた。
22) 例えば川本宇之介が図書館を一生涯に亘る教育，自由意志に基づく自己教育に有効な教育機関と明確に位置付けたのは1931年に刊行された『社会教育の体系と施設経営・経営編』最新教育研究会，pp. 4-5においてである。
23) 今澤は「児童図書館」と「児童室」を同義に用い，論考の中で「児童図書館」を多用することから本稿も「児童図書館」を使用する。
24) 東京市立日比谷図書館『東京市立図書館一覧　大正十五年』p. 18
25) 『其事業』第8号，1922年
26) 『其事業』第18号，1924年
27) 東京市立日比谷図書館『東京市立図書館一覧　自大正九年至大正十年』p. 19　尚「図書問合用箋」には「私は左の事項に就いて研究したいのですが適当な本がありましたらお知らせを願ひます。」とあり，所定の欄に研究事項（2件まで）と住所氏名を記入するようになっている。また，「たまにしか御登館出来ない方」のために郵便（往復葉書）での問い合わせにも応じていた。